

サウンドデザイン演習（女子美術大学）

## 中世の音楽

～単旋律から複旋律への試み

講義担当：石井 拓洋

ishii05042@venus.joshiabi.jp

# 1 「中世の音楽」の時代

「ヨーロッパ音楽の歴史を語るときに、どうしても無視するわけにはいかないのが、キリスト教との関係です」

[ 金澤 2007:1 ]

「音楽にかぎらず、他の芸術や文学についてもいえることですが、ヨーロッパ文化を支える基盤としてキリスト教が果たした役割はいくら強調しても強調しすぎることはないと言えてよいほど大切なものだったのです」

[ 金澤 2007: 1-2 ]

# 1 「中世の音楽」の時代

「キリスト教は歌う宗教である」

[ 金澤 2007: 16 ]

# 1 「中世の音楽」の時代

- 中世とは

- 西ローマ帝国の滅亡(→古代の終わり/467年)  
～東ローマ帝国の滅亡(1453/近世のはじまり)

(この時代)

- 音楽は**キリスト教の典礼**のもとで大きく発展した
- **単旋律から複旋律**へと約1000年かけて発展した

# 1. 単旋律の音楽の起源

## グレゴリオ聖歌

- ・ 西洋音楽の基礎といえるのが「グレゴリオ聖歌」(6c頃～編纂)



試聴《天よ、上より雫をしたたらせよ》(待降節 第4主日のミサのイントロイトウス)

CD: “Gregorian Chant” Pater Hubert Dopf SJ, Choralschola Der Wiener Hofburgkapelle

- ・ ローマ教皇グレゴリウスI世 (590-604在位)が中心となって編纂された(といわれる)聖歌
- ・ グレゴリオ聖歌はローマ・カトリック教会のミサ等の典礼で用いられた「単旋律／無伴奏」の音楽。歌詞はラテン語のミサ通常文。

# 1. 単旋律の音楽の起源

## グレゴリオ聖歌

- ミサ mass (英)
  - カトリック教会における典礼の1つ。その呼び名。
  - イエスの肉と血の象徴であるパンと葡萄酒を拝領する儀式
  - この儀式起源は、イエスが十字架にかかる前日の「最後の晩餐」

「イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。『取って食べなさい。これは私の体である。』また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。『皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流される私の血、契約の血である。』」

マタイによる福音書 26章-26,27,28

十二使徒の名前は  
マタイによる福音書 10:1 より

ヨハネ  
ゼベダイの子ヨハネ  
使徒ヨハネ  
(ゼベダイの子ヤコブの兄弟)

フィリポ

トマス

熱心党のシモン

徴税人のマタイ  
福音記者マタイ

タダイ

ゼベダイの子ヤコブ

イスカリオテのユダ

アンデレ  
呼ばれるシモンの兄弟)

アルファイの子ヤコブ

バルトロマイ

ペトロと呼ばれるシモン

L'Ultima Cena 最後の晩餐 (1495-1498)  
サンタ・マリア・デルレ・グラツィエ教会 (Milan・Italia)

# 1. 単旋律の音楽の起源

## グレゴリオ聖歌

- ・ ミサ = イエスと食事を共にして、いつも共にいることを確認する儀式。

### 1.【開祭の儀】

主な聖歌：『あわれみの賛歌』(キリエ・エレイソン／ギリシャ語)

### 2.【ことばの典礼】（聖書朗読と神父の説教の部分）

主な聖歌：『アレルヤ唱』

### 3.【感謝の典礼】（聖体が用意される部分）

主な聖歌：『感謝の賛歌』（サンクトゥス、ベネディクトス）

### 4.【交わりの儀】（聖体拝領の部分。メインの部分）

主な聖歌：『平和の賛歌』（アニュス・デイ）

### 5.【閉祭の儀】

# 1. 単旋律の音楽の起源

## グレゴリオ聖歌

- ・ミサ通常文 = 典礼の中で決められた、毎回、常に同じ言葉で唱える典礼文
- ・「ミサ通常文」の中には、聖歌の歌詞として、会衆が唱うものもある。  
(覚えておきたい例) ↓

開祭の儀『あわれみの歌』



「主よ、あわれみ給え。      キリスト、あわれみ給え。」

“Kyrie, eleison.  
(キリエ, エレイソン)

Christe, eleison. “  
(キリストエ, エレイソン)

“Kyrie, eleison” (ギリシャ語) = 「主よ、こっちむいてください」

※この歌詞(“キリエ, エレイソン”)で多くの名曲が作曲されている。



例: バッハ 《口短調ミサ》(1724)

# 1. 単旋律の音楽の起源

## グレゴリオ聖歌

※（バチカンでのミサ映像）

- ・ キリエ・エレイソン
- ・ 聖体拝領

# 7 単旋律から複旋律への歴史

- 中世の音楽の挑戦とは、グレゴリオ聖歌の単旋律(定旋律)に対して、「どのように別パート(対旋律)を追加するか」にあった。
- **オルガヌム： 定旋律を元に「対旋律」を作る技法。**
- 「当時[9C頃]は、まだ、ゼロから何か曲をつくるという意識はほとんどなかった。『曲を作る』とはグレゴリオ聖歌に何か少し加える[略]ことだった。この編曲が、オルガヌムと呼ばれるジャンルである」  
[岡田 2005: 14]
- 平行オルガヌム: 定旋律の下部に平行して動く対旋律を作る。  
→ **5度や4度の音程**で平行に動かす。

# 8 アルス・アンティークワ

13世紀のフランスでの、自由オルガヌムによる音楽。  
ノートルダム楽派のペロタン、レオナンが有名  
グレゴリオ聖歌に対して、自由に動く対旋律を付けられる  
ようになった。5度の完全協和音の響きが特徴。  
この時期は、フランスが音楽的に最もすすんでいた。

- 代表的な作曲家（ノートルダム楽派・フランス）  
ペロティヌス（ペロタン）（1100頃～1200頃, 仏）  
レオニヌス（レオナン）（1100頃～1200頃, 仏）



《Sederunt principes》 CD: “Léonin & Pérotin: Sacred Music from Notre-Dame”より



《Clausulae & motet on \_Dominus-II》CD: “Léonin & Pérotin: Sacred Music from Notre-Dame”より

# 9 多声音楽

- ・多声音楽：自由オルガヌムにより作られた、  
3声4声(3パート、4パート)からなる音楽。
- ・アルス・ノヴァ  
→14Cのフランスにおける、多声音楽。リズムがより充実した。  
作曲家・ギヨーム・ド・マシヨー (1300頃 - 1377, 仏)



《Kyrie Eleison》

CD: “Guillaume de Machaut: Messe de Nostre Dame”より

- ・イギリスの多声音楽  
→ 3度・6度の音程 (ド音に対するミ音の音程)の多用。  
作曲家・ダンスタブル (1390 - 1453, 英)  
→ ルネサンス音楽への準備



《Kyrie, JD 1》

CD:” Dunstable: Sweet Harmony - Masses and Motets”より

# 10 ルネサンス音楽

- ・西洋での15C～16C頃までの音楽を指す（日本は室町時代）
- ・英国作曲家ダンスタブルの3度6度の響きに触発され、より豊かな響きの多声音楽を追究した（ディファイなど）
- ・作曲家パレストリーナ (1525-1594, 伊) ローマで活躍。パレストリーナ様式を完成（無伴奏対位法的合唱）。単旋律から複旋律の発展が一段落つく。ローマ楽派の代表的存在。教会音楽の理想型。16世紀。



《Missa Brevis - Kyrie》 CD “Missa Brevis”より



《E Dal Letto Di Mille E Mille Colpe》 CD “Palestrina: Priego alla Beata Vergine”より

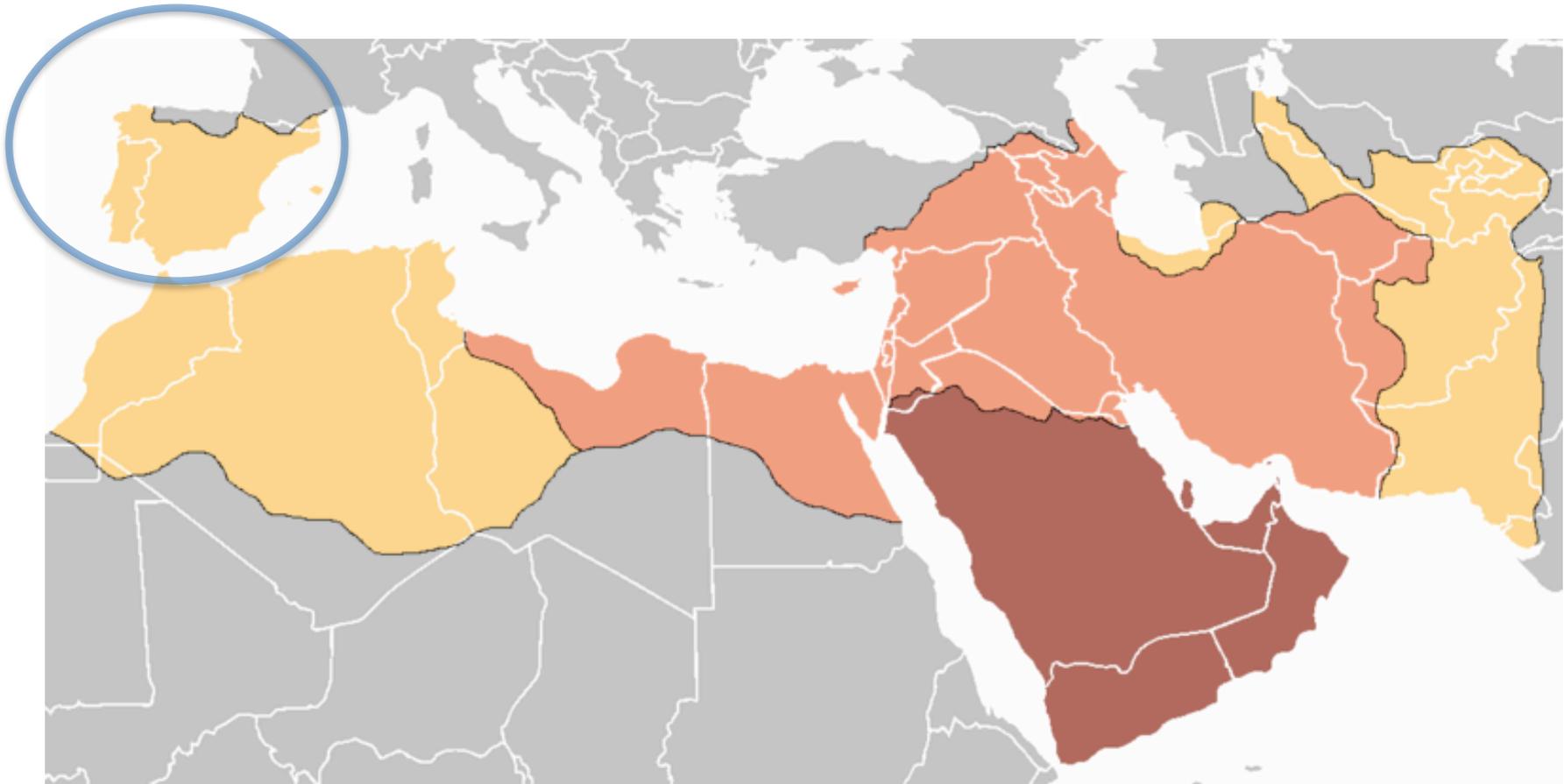
※ 補足

「ルネサンス」って？

## ※ 「ルネサンス」って？

- ・ 4世紀の「ゲルマン民族の大移動」以来、  
ヨーロッパは、ギリシャ・ローマの古典文明の叡智を  
忘れてしまった。（プラトンやアリストテレスのこと等）
- ・ その間、ギリシャ・ローマの叡智は、「イスラム帝国」が保存
- ・ 8C頃、スペイン付近（イベリア半島全土）は、  
完全にイスラム化していた。（イスラム教化した）
- ・ しかし、ヨーロッパのキリスト教徒は、これを良しとしなかった。

## ※ 「ルネサンス」って？



8世紀頃の「イスラム帝国」の勢力図（イベリア半島がイスラム化している）  
<http://ja.wikipedia.org/wiki/イスラム帝国>

## ※ 「ルネサンス」って？

- 「国土回復運動」(レコンキスタ) 8C~1492年(15C)  
キリスト教徒による、イベリア半島奪回運動。
- 1492年「グラナダ解放」で、半島を完全にキリスト教化した。
- その際、敗走するイスラム教徒が、保存していたギリシャ・ローマの文献を捨てて行った。
- その文献を拾って、中世ヨーロッパは「ギリシャ・ローマ」の古典を  
はじめて知った。

## ※ 「ルネサンス」って？

- イスラム教徒がもっていた文献は、アラビア語。
- 12Cのヨーロッパの人々は、ギリシャ・ローマの叡智を知るために、アラビア語→ラテン語の翻訳をはじめめる。
- アラビア語の前に、ギリシャ語が原典であったことを知り、ギリシャ語→ラテン語の翻訳をはじめめる。

## ※ 「ルネサンス」って？

- 古典を知るための翻訳作業が、12世紀に「大学」を作り、ヨーロッパでの学問がスタートする。  
パリ大学(1150年頃), オクスフォード大学(1100年頃)

→ この「古典古代の文化の復興」傾向こそ、14Cからの「ルネサンス」運動の源となる。

## ※ 「ルネサンス」って？

- 古代ギリシャの知見から、「天体のハルモニア」としての音楽の価値に気づく（ピタゴラス／プラトン）
- 当時の大学での教育内容（12C頃）  
→ 「自由七科」（三学四科）

三学（文法・修辞学・論理学）、  
四科（算術、幾何学、天文学、音楽）

- 「自由七科」が、現代の大学の「一般教養」の起源

# 参考文献

- ・金澤正剛 (2007)『キリスト教と音楽:ヨーロッパ音楽の源流をたずねて』音楽之友社
- ・ドナルド・H・ヴァン・エス (1981=1986)『西洋音楽史:音楽様式の遺産』船山信子ほか  
(訳) 新時代社
- ・岡田暁生 (2005)『西洋音楽史』中公新書
- ・皆川達夫 (1977)『中世・ルネサンスの音楽』講談社現代新書
- ・村上陽一郎 (2004)『やりなおし教養講座』NTT出版
- ・ミサ式次第(会衆用) カトリック関口教会